

## 『純粋理性批判』の叙述方法とその前提

吉 田 修

カント (Immanuel Kant) の主著『純粋理性批判』(《Kritik der reinen Vernunft》) を十全に理解しようと欲する人は、カントがこの著作の冒頭において既に想定していたと考えられる「立場」〈Standpunkt〉あるいは「地平」〈Horizont<sup>(1)</sup>〉を、あらかじめ明らかにしておくことが必要であろう。というのも、このような「立場」の解明なくしては、『純粋理性批判』全体は言うに及ばず、その第1部である「超越論的感性論」〈Transzendente Ästhetik〉ですら十分に理解することができないからである。たとえば「超越論的感性論」でカントは、何等の説明も与えることなく、「形相」〈Form〉「質料」〈Materie〉という概念を使用しているのである。(A 20, B 34) また同様に「超越論的感性論」以降『純粋理性批判』の具体的探究の方法として明らかにされる「孤立させる」〈isolieren〉あるいは「分離する」〈absondern〉という概念ですら、その意味は勿論のこと、そこから孤立させられるもの(たとえば、「感性」〈Sinnlichkeit〉「悟性」〈Verstand〉等)の必然性さえ、何等説明を与えられていないのである。(A 22, B 36) そしてこのような事情は、『純粋理性批判』の読了後も、ほとんど変わらないのである。

ところがカントの批判期前(vorkritisch)の諸著作、特に公開討論に付されたラテン語による諸著作<sup>(2)</sup>において、カントは必ず概念の説明、定義からその叙述を始めているのである。それと較べるならば、『純粋理性批判』における上記の諸概念の提示の仕方は、明らかに奇妙であり、このことは『純粋理性批判』の叙述開始に際して、何等かの「前提」、言い換えれば「立場」が想定されていたのではないか、という推測に十分な理由を与えてくれるのである。

従って私はこの小論において、『純粋理性批判』の独自の「叙述方法」〈Darstellungsart〉に関するカントの言明を手掛りとしつつ、それが持つ「前提」、ひいては『純粋理性批判』の叙述開始に際して既にカントが立っていたと考えられる「立場」の解明を目指すものである。そしてこの解明に際して、その「道標」〈Wegmarke〉的役割りを果してくれるものが、「分析」〈Analysis〉という方法概念である<sup>(3)</sup>。この方法概念は、『純粋理性批判』の解釈に際して今まで不当に過少評価されて来たものであるが、これが如何に『純粋理性批判』の生成にとって重要な概念であったかは、カントの批判期前の諸著作を一読すれば容易に理解されることである<sup>(4)</sup>。従って私は第1に、この「分析」という方法概念が『純粋理性批判』において如何に重要な概念であるかを、その概念分析を通じて明らかにする。更に「分析」〈Analysis〉という方法概念は、この分析が向けられる「対象」(それは、分析に対する「前提」と呼ばれるもの)を必要とするばかりか、その分析の「方向性」、そしてその分析から「分析されて来るもの」という構造契機も含んでいるのである。このことは、我々人間の「分ける」〈teilen〉という行為を考えて見れば容易に理解されることである。即ちそこには、「分けられる当のもの」「どのように分けるか、その目安」、そして「そこから分けられて来る

もの」が含まれているのである。勿論「どのようなもので分けるか」（たとえば、カミソリかナイフか）ということも問題となるが、このことはこの小論では割愛しておく<sup>(5)</sup>。とにかく「分析」という方法概念は、次のような3つの構造契機を持っているのである。即ち「分析の対象」〈Gegenstand der Analysis〉「分析の方向性」〈Richtung der Analysis〉そして「分析されてくるもの」〈das Analysierte〉の3つである。従ってこの小論は、第1に「分析」という方法概念の重要性の確認後、その各構造契機を明らかにしていくという方法で進められるのである。即ち〔A〕『純粋理性批判』の叙述方法の独自性、〔B〕『純粋理性批判』における「分析」の意味、そして〔C〕「分析」の方向性としての「形相一質料一図式」という順序でこの小論は進められる。

#### 〔A〕『純粋理性批判』の叙述方法の独自性

前述のような『純粋理性批判』の叙述にまつわる奇妙さについて、カント自身その2年後に書かれた『プロレゴメナ』(Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können. (1783年)において、1つの説明を与えている。そしてこの説明から、容易に次のような解釈が提起される。即ち『純粋理性批判』の叙述は、「総合的」〈synthetisch〉な方法で進められているのであり、決して「分析的」〈analytisch〉な方法で進められるものではない。

(IV s. 274f) 従ってある事実を「前提」し、それを「分析」することによって、それぞれの構成要素を明らかにするという方法は、『純粋理性批判』では取られていないのである。いやむしろ、取られ得ないのである。なぜならば『純粋理性批判』でカントが明らかにしようとした「認識の基礎付け」〈Grundlegung der Erkenntnis〉という事柄そのものが、「どのような事実にも基づかない」ことを要求しているからである。即ち「認識」〈Erkenntnis〉をその根源的の萌芽にまで遡って根拠づけようとする場合、ある認識を真(または偽)として前提することは、1つの循環論(Dialexe)(A 57, B 82)以外の何物でもないのである<sup>(6)</sup>。そしてこのような事態こそ、カント以前に、「認識」の問題を明らかにしようとした人々全てが陥った事態だったのである。従って「認識」という事柄を明らかにしようとする場合、もはやこの「認識」に依拠することは許されないのである。言い換えれば我々人間の認識は、真であると同時に、偽でもあり得るのである。従ってそれは「前提」されるべきものではなく、むしろ何等かの仕方では「基礎づけられ」ねばならないものなのである。

従って『純粋理性批判』における諸概念は、決して人間の「経験認識」〈Erfahrungserkenntnis〉(B 1)という事実を「前提」して、その「分析」の結果得られたものではない。それ等は、まさにこのものの可能性の根拠として、このものを基礎づけるものとして、「総合的」に用いられるものなのである。従ってこの点でカントは、決して「経験論者」〈Empirist〉でもなければ、「実証主義者」〈Positivist〉でもないのである。

上記の解釈によって一体何が明らかにされたのであろうか。それは次の3つの事柄である。第1は、カント自身が『純粋理性批判』の叙述方法は、決して「分析的」ではなく、「総合的」であると証言していることである。(IV s. 274) 第2は、「分析」という方法は、「求められているものを、与えられたもの」として前提し、そこから出発するものである。(VI s. 276 Anmerkung) それに対して「総合」という方法は、「どのような事実にも基づかず」(IV s. 274)に進められるのであ

る。そしてこのことも、カント自身の説明によっている。最後に、我々人間の経験認識は、そのものとしては前提され得ないものであり、むしろ「基礎づけられる」べきものなのである。

以上が確認されたことである。しかしこれ等によっては、私が問題としている核心部分は、ほとんど明らかにされはしないのである。たとえばカントは、批判期前から、そして『純粹理性批判』の「序論」において繰り返し主張しているように、哲学の主要な仕事は「分析すること」〈Zergliederung〉(A 5, B 9)にあるのである。更に前述の「孤立させる」〈isolieren〉という概念ですら、「総合的」というよりもむしろ「分析的」により近い概念である。しかもカントが『純粹理性批判』の各所で具体的に取っている手続きは、この「孤立させる」という方法、即ち「分析的方法」なのである<sup>(7)</sup>。そしてこのことは、明らかに前述の確認事項と矛盾するのである。そしてこの矛盾こそ、明らかにされねばならないことであり、このことに疑問を抱かないカント解釈者は、カントの言を鵜呑みにし、且つカント哲学を、その完成された姿としての『純粹理性批判』からのみ理解しようとする人々なのである<sup>(8)</sup>。しかしここに矛盾が存在する以上、カントの言明は問い直されねばならないのであり、同時に『純粹理性批判』における「分析」の重要性が明らかにされねばならないのである。

確かにカント自身が言明しているのであるから、『純粹理性批判』の方法が「総合的」と「特徴づけられる」ことは認められねばならないであろう。しかし「総合」〈Synthesis〉という概念は、決してそれだけで単独に存在する概念ではないのである。それはあくまでも「分析」〈Analysis〉という概念と対になっていることを忘れてはならないのである。そしてこのことは、語源からも明らかである<sup>(9)</sup>。即ち〈σύνθεσις〉とは、「多くのものを、統一にもたらす結合の働き」であり、〈ἀναλύσις〉とは、「一なるものを、多くのものへと分割する働き」のことなのである。従って「総合」は「分析」を予想しているのであり、「分析」は「総合」を前提しているのである。まさにこの両概念は、対概念として1つの「円環」をなしているのである。

ところがヴント(Max Wundt<sup>(10)</sup>)が報告しているように、ボルフ(Christian Wolff)によって両概念が学的方法概念に仕上げられる際に、一方から他方が区別され、それぞれが別々の学に割当てられたのである。即ち〈Synthesis—Analysis〉は、〈Demonstrare—Investigare〉と同じ意味の対概念とされたのである。そして対概念の前項は、概念から経験に至る方法として「真理」の学的方法とされ、後者は経験から概念に至る方法として「蓋然性」の学的方法とされたのである。そしてカントの1760年代における「形而上学の真の方法」〈d. achte Methode der Metaphysik〉をめぐる論考は、上述のような概念空間の中で行なわれたのである。従ってカントが次のように結論づけたのも容易に理解される。

》 Es ist noch lange die Zeit nicht, in der Metaphysik synthetisch zn verfahren; nur wenn die Analysis uns wird zu deutlich und ausführlich verstanden Begriffen verholten haben, wird die Synthesis den einfachsten Erkenntnissen die zusammengesetzte, wie in der Mathematik, unterordnen können. 《(II s. 290<sup>(11)</sup>)

ここに述べられているように、形而上学、一般に哲学は、総合的に語るには「まだその時ではない」のである。がしかし、それは決して「分析」という方法に終始するということではないのである。それはあくまでも「総合」という方法において完成されるのである。このことは次の文面からも明らかである。

〉 Man soll, heißt es daselbst, durch sichere Erfahrungen, mit Hülfe der Geometrie die Regeln aufsuchen, -----

Wenn man gleich den ersten Grund davon in den Körpern nicht einsieht, so ist gleichwohl gewiß, daß sie nach diesem Gesetze wirken, und man erklärt die verwickelte Naturbegebenheiten, -----

《 (II s. 286 <sup>12)</sup> )

ここでは、ニュートン物理学の方法にたとえて哲学の方法が語られているが、ここに見られる〈aufsuchen — erklären〉という対概念が、前述の〈Investigare — Demonstrare〉という対概念に対応していることは明らかである。従ってカントの1760年代の論考から明らかにされたことは、形而上学、一般に哲学が専らとする方法は「分析」ではかるが、しかし決してそれに終始するものではないのである。この「分析」は、あくまでも「総合」を予想しているのである。そして批判期前の長い探究の後初めてカントは、次のように語り得たのである。

〉 indem wir die Analysis nur so weit treiben dürfen, als sie unentbehrlich notwendig ist, um die Prinzipien der Synthesis a priori, als warum es uns nur zu tun ist, in ihrem ganzen Umfange einzusehen. 《 (A 12. B 255)

『純粋理性批判』は、1つの学的体系〈System〉あるいは理説〈Doktrin〉と呼ぶには不十分である。従ってそれは、単に「批判」〈Kritik〉と呼ばれるべきものである。(A 12. B 26) しかしこの批判は、哲学的思索において、初めて「総合的」に叙述することを許されたものなのである。これが『純粋理性批判』である。ところが、この「総合的」叙述は、あくまでもそれに必要な「分析」を同伴しているのである。従って確かにカントは、『純粋理性批判』の各所で、「分析」と「総合」を何度も繰り返しているのである。ここには、前述の「分析」「総合」という対概念が持っていた円環が回復されているのである。しかもこの円環は、単純に繰り返されているのではなく、螺旋状に展開され、より高次の「総合」が目指されているのである。従ってカントが『純粋理性批判』の叙述方法を「総合的」と特徴づけているのは、この「総合」ということへの重点化を表明しようとしたことであり、決してそれが「分析」という方法を排除している、という意味ではないのである。しかもカントが、ニュートン (Newton) やガリレイ (Galilei) と並んで、当時の「化学者」〈Chemiker〉であるトリチェリ (Torricelli) あるいはシュタール (Stahl) を、「緒論」において取りあげていることは、よりこの「分析」という方法概念の『純粋理性批判』における重要性を裏付けているのである。(BXII) なぜならば、このような化学者から専ら学ばれるべき事柄は、まさに「物質の分析」〈Scheiden der Materien〉(A 842. B 870) ということだからである<sup>13)</sup>。

#### 〔B〕『純粋理性批判』における「分析」の意味

前節において私は、『純粋理性批判』における「分析」〈Analysis〉という概念の重要性を明らかにした。しかし、この「分析」という方法が、『純粋理性批判』において、どのような意味を具体的に持っているか、は依然不明のままである。容易に理解されることは、この「分析」という方法を『純粋理性批判』に持ち込むことが明らかな矛盾を生じる、ということである。即ち、先に確認されたように「分析」という概念は、ある「前提」を必要とするのである。ところがこの方法を

『純粋理性批判』に持ち込むことは、この著作の「無前提」を破壊する恐れがあるのである。このような矛盾は、如何にして解消されるのであろうか。

私はこれに対して、『純粋理性批判』も、1つの「前提」から出発しているのであり、ここに「分析」という概念を持ち込むことは何等矛盾を生じるものではない、と考える。勿論私は、ここで批判期前の諸著作が『純粋理性批判』の前提である、という単なる時間的事実的問題を持ち出そうとするものではない。そうではなく、『純粋理性批判』そのものが、本質的に持っている1つの「前提」のことである。そしてそれが、前に確認された我々有限なる人間の経験認識は、「基礎づけられる」必要がある、というカントの確信なのである。

カントは、『純粋理性批判』を始めるに当って、決して「数学」や「幾何学」という事実を「前提」しているものではない。この意味で『純粋理性批判』は、「無前提」である。ところが我々人間の認識とは、それ自身真でも偽でもあり得るのである。従って「認識」そのものが問題とされる限り、それはそれ自身では「基礎づけられ」得ないものなのであり、それは「それとは別のもの」即ち「理性」〈Vernunft〉によって「基礎づけられ」ねばならないのである。従ってカントは『プロレゴメナ』で正しく言っていたのである。

》 Was noch nichts als gegeben zum Grunde legt außer die Vernunft selbst und also, ohne sich auf irgend ein Faktum zu stützen, 《 (IVs. 274)

まさにこのような事柄、即ち「認識」の「基礎づけられる」という性格、そして「基礎づけるもの」としての「理性」の分析ということこそ、『純粋理性批判』の開始に際して存在していた「前提」であり、このことによって『純粋理性批判』における「分析」という方法も、具体的な意味を持つことができるのである。

そしてこのことは、『プロレゴメナ』における次のような対概念の提示によってより明らかとなる。即ち〈synthetisch — progressiv〉、〈analytisch — regressiv〉という対概念である。(II s. 276 Anmerkung) ところで「背進的」あるいは「遡及的」と訳される〈regressiv〉という語は、カントの定義からすると次のようである。

》 daß, wenn das Bedingte gegeben ist, uns eben dadurch ein Regressus in der Reihe aller Bedingungen zu demselben aufgegeben sei. 《 (A 497, B 526)

即ち「遡及的」〈regressiv〉とは、「被制約者から制約者へと遡る」ことなのである。そしてこのことが上記の対概念では「分析的」〈analytisch〉と等置されているのである。従ってここから、先に述べられた「基礎づけられる」という認識の性格は、その「被制約性」〈Bedingtheit〉ということであり、この被制約的な認識に対して、最初に適用される方法は、「被制約者から制約者へと遡る」方法としての「分析」〈Analysis〉なのである。そしてこの「分析」から明らかにされる「制約者」こそ、「理性自身」〈Vernunft selbst〉であり、その「ア・プリオリな総合の諸原理」〈Prinzipien der Synthesis a priori〉(IVs. 274)なのである。

しかも、このような『純粋理性批判』における「分析」〈Analysis〉という方法の有り方はカント自らが強調しているように、彼独自の有り方なのである。なぜならば、伝統的に、特にライプニッツ・ボルフ哲学において用いられていた「分析」の専らとする仕事は、「与えられた概念を、その

内容に従って分析し、判明性へともたらずこと」(A 65.B 90)であった。これは、言わば「概念」という同一の次元に留まりながら、その「不明瞭さ」から「判明性」へと単純に移行する手続きにすぎないのである。ところがこれに対して『純粋理性批判』における「分析」は、ただ単に「概念」あるいは「認識」の次元に留まるのではなく、その次元を「超え」て、その根源的「誕生場所」(Geburtsort) (A 66.B 90)としての「理性自身」の解明に向うのである。そしてこの「分析」の持っている独自の「方向性」こそ、『純粋理性批判』を、そしてより強く「カント哲学」そのものの特徴づけているものなのである。このことは、カントの次の言明からも読みとれよう。

》 daß wir sie im Verstande allein, als ihrem Geburtsorte, aufsuchen und dessen reinen Gebrauch überhaupt analysieren; denn dieses ist das eigentümliche Geschäft einer Transzendental-Philosophie; das übrige ist die logische Behandlung der Begriffe in der Philosophie überhaupt. ((A 66.B90f)

ここで彼は、「分析」という方法の有り方を通して、自己の哲学即ち「超越論的哲学」と他の哲学一般を区別しているのである。そしてその根拠こそ、「分析」という方法が持っている「方向性」の独自性にあるのである。またこのことが同時に、カントの「超越論的」(transzendental)の定義(B 25)と密接に結びつけられていることは明らかである<sup>14)</sup>。

付け加えておこなうならば、『純粋理性批判』における「分析」の有り方は、その独自の「方向性」において、前に述べておいた「分析」と「総合」が持っていた「円環」を回復しているのである。しかもこのような回復過程の中から、カントが「判断」(Urteilen)の区別の際に、独自に与えた「分析的」「総合的」という特徴も獲得されて来たものと考えられる<sup>15)</sup>。

私は以上において、『純粋理性批判』における「分析」(Analysis)という方法概念の重要性、そしてそれが向けられている「前提」としての有限なる人間認識の「被制約性」、そしてそこに働らく分析の独自の「方向性」としての「理性自身」あるいは「認識能力」(Erkenntnisvermögen)への「目配り」を明らかにし得たと考える。

しかしこのような「方向性」「目配り」を獲得したからといって、「分析」という方法が具体的に完成されたことにはならないであろう。なぜならば、カントが『純粋理性批判』において「分析的」意味を担わせている「孤立させる」等の概念は、より具体的に「分析されてくるもの」(das Analytische)を既にその目配りの内に取り込んでいると思われるからである。従って次に私は、この「分析されてくるもの」としての「感性」(Sinnlichkeit)「悟性」(Verstand)等が、「分析」という方法と如何に関係しているかを、「形相」「質料」概念を手掛りとして明らかにしてみよう。

### 〔C〕「分析」の具体的方向性としての「形相—質料—図式」

前節で確認されたように、『純粋理性批判』における「分析」は、「理性自身」言い換えれば「認識能力」へと向けられているのである。しかしこのことは、より具体的には如何なる事を意味しているのだろうか。

カントが批判期前において絶えず求め続けて来たのは、前述のように「形而上学の真の方法」であった。カントは一方でロック (Locke) ヒューム (Hume) 流の「経験論」(Empirismus)、そして他方でライプニッツ (Leibniz) ボルフ流の「合理論」(Rationalismus)との対決を通して、「形而上

学」〈Metaphsik〉という人間にとって不可欠の学問を、その混乱から救出しようと試みたのである。そしてその探究の中から、カントは次のような確信に至ったのである。

「だが純粋哲学においては、方法が一切の学に先行する。形而上学とは、かかるものである。」  
(II s. 411<sup>16</sup>)

そしてこの学が遵守すべき真の方法とは、次のものである。

「感性的なものと悟性的なものに関する形而上学の一切の方法は、主として次の規定に帰着する。感性的認識固有の原理が自己の限界を超えて、悟性的なものを触発しないように、細心に注意すべきである。」(II s. 411<sup>17</sup>)

これこそ、カントの批判期前の長年の探究の成果なのである。即ち重要なことは、我々人間の認識が「誤謬」〈vitium〉に陥るのは、まさに「感性的認識」〈cognitio sensitiva〉と「悟性的認識」〈cognitio intellectus〉との「区別」を忘れる、あるいはその適切な関係を忘却する所に生じるのである。そして「判断」〈judicium〉こそ、このような両者の関係、結合の場として、「認識」を問題とする限り解明されるべき対象なのである。付け加えるならば、「判断」とは、語源からも明らかのように、一方では「根源的に分割する」〈ur-teilen〉働きであると同時に、他方で分割されたものを「総合し、保持する」〈iūs〉ものでもある。そして人間認識の根源の秘密は、ここに存するのである。従って形而上学の真の方法を求める哲学が専念すべき事柄は、この「判断」における「区別」と「総合」に注意を向けることであり、これが「誤謬」の迷路に立ち入らない唯一の方法なのである。

従ってカントは、「認識」の問題を「判断」の解明を通して明らかにしようとするのである。ところで「判断」とは、論理学上「主語」と「述語」から「合成されているもの」なのである。即ち人間認識とは、その根源においてまさに「合成されているもの」〈ein Zusammengesetztes〉なのである。これは言い換えれば、認識は各構成契機によって「制約されている」〈Bedingtheit〉ということなのである。従って先に確認された「分析」が向けられた「認識能力」とは、まさに「判断」を構成するものとして、従ってその構成契機へと適切に分析、分類されねばならないのである。

ところでカントの当時、既に人間の「認識能力」〈Erkenntnisvermögen〉に関する諸分類が提出されてはいた。たとえば上級認識能力としての「悟性」「判断」「理性」等がそうであった<sup>18</sup>。ところがこのような分類のいづれもが、カントにとって不十分であったことは明らかである。なぜならば、カントにとって「認識能力」の分類は、ただ単にそれぞれが分類されるだけでは不十分であり、それは「認識」を基礎づけるものとしての「判断」においてそれぞれの「働き方」の相違によって区別され、同時に相互に関係づけられねばならないのである。たとえば「感性」は、そのものだけでは不十分であり、「悟性」との関係において区別づけられ、また関係づけられねばならないのである。そしてこのような仕事こそ哲学が最初に専念しなければならないものなのである。

従って「認識能力」の「分析」に際して必要なことは、あらかじめ「分析されてくる」諸々の能力の相互関係を明らかにしてくれる視点、私が先に使用した言葉でいえば「目配り」なのである。そしてカントは、このような分析上の「目配り」をも、再び「判断」という事柄の解明から得て来たと考えられる。即ち、「判断」とは、前述のように合成されているものである。ところでカントの当時の論理学上「主語」と「述語」は、「規定されるもの」〈das Bestimmbare〉で

あり、同様に「繫辞」はそれに対して「規定するもの」〈der Bestimmende〉なのである。またそれは、「判断」の「質料」〈Materie〉及び「形式」〈Form〉とも呼ばれるものである<sup>19</sup>。従ってここから有限なる人間の「認識」は、その根源としての「判断」において「形相」と「質料」から合成されているものであり、従ってこの判断の発生根拠としての「認識能力」は、「形相」「質料」概念に従って分析され、それぞれ区別、関係づけられねばならない、と解されるのである。

勿論「形相」「質料」という概念を、カントは単に「論理学」の用語分析から獲得して来たとするのは早計であろう。そしてこのことは、『純粋理性批判』の10年前に書かれた『可感界と可想界の形式と原理』(De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis 《1770年》)という著作の検討から明らかにされることである。ところでこの著作は、『純粋理性批判』以前の著作中最も重要なものであるが、これはカントの諸著作の中でも異色の著作であろう。なぜならば、この著作の中で描かれている世界〈mundus〉は、古色蒼然とした、いわば伝統的世界であり、それはカントの他の諸著作ではほとんど見かけることのできないものであるからである。そしてこの事情は、この当時から『純粋理性批判』を書き上げる頃まで、カントが大学で「哲学史」を講じ、また古代ギリシアの哲学者達の学説に親しんでいた、というカント研究者の報告からいくぶん理解できよう<sup>20</sup>。そしてこの著作及び『純粋理性批判』において多く見られる古代ギリシア時代に起源を持つ哲学用語、たとえば〈Form〉〈Materie〉〈Ästhetik〉〈Analytik〉〈Kategorie〉〈Phaenomenon〉等々は、たぶんこの哲学的伝統への沈潜の内から獲得されて来たものであろう。そして今問題とされている「形相」「質料」という概念についても同様である。そしてそれ等をカント自身が主題的に取り扱っているものとしては、『純粋理性批判』の前半部分の最後に与えられる説明を除けば、この著作が主要なものである。従って『純粋理性批判』の冒頭に用いられている「形相」「質料」概念は、『可感界と可想界の形式と原理』で用いられた両概念を引きつぐものであろう。

このことはまた、カントがこの伝統的哲学用語を借りることによって明らかにしようとした事柄の連関からも明らかである。即ちカントはこの著作において、人間の認識が「合成されているもの」であり、それは「形相」の側に属するものと「質料」の側に属するものから「合成されている」とする。たとえば次のようである。

「ところで、感官の表象には、まず質料と呼ばれるようなもの、即ち感覚が内在するが、そのほかにも形式と呼ばれるもの、即ち感官を触発する多様が、どこまで心のある自然法〈lex naturalis animi〉によって同位関係におかれるか、を示す可感的なものの形式も内在する。」

(II S. 392)

ここに明瞭に述べられているように、「認識」の解明へ、そして「認識能力」の分析へと進むカントにとって、「形相」「質料」という概念が、その具体的分析の手掛りとされているのである。

確かにカントが、この著作において「形相」「質料」という両概念に与えている説明は、上記のような意味合いは薄い。(II s. 389)というのも、ここで問題とされている事柄が、「認識」というよりも「世界」〈mundus〉の解明にあるからである。しかしここで注目しなければならないことは、伝統的哲学用語である「形相」「質料」という対概念が、「世界」という事象の「分析」に適用されていることである。即ち「形相」「質料」という対概念が、カントによってまさに「分析」の具



体的「方向性」を与えるものとして働いているのである。そして私は、このように分析に対して、あるいは一般にある概念の「叙述」〈Darstellung〉に対して1つの手掛りを与えてくれるものを、カントにならって「図式」〈Schema〉と呼ぶことにする<sup>21)</sup>。従ってカントにとって、「形相」「質料」という対概念は、より深く哲学の伝統の内から獲得されて来たものであり、それは「形相—質料—図式」〈Form—Materie—Schema〉として「世界」の分析に適用されるのであり、同時に有限なる人間の「認識」の分析に際しても適用されるのである。

そしてカントは、この「形相—質料—図式」に従って『純粋理性批判』の具体的分析を、即ち「孤立させる」〈isolieren〉等の働きを獲得することができたのである。即ち人間の認識は「制約されているもの」あるいは「合成されているもの」である。そしてここに最初に働きかけるものは、それを「制約しているもの」「合成しているもの」へと遡る「分析」という方法なのである。しかもこの分析は、「形相—質料—図式」に従って、認識の根源である「認識能力」の具体的分析を行うのである。具体的には、「超越論的感性論」では「直観の形式と感覚」、「超越論的分析論」では「悟性と感性」、そして最後に「超越論的弁証論」では「理性と悟性」へと分析されるのである<sup>22)</sup>。そしてこれ等の対概念の前項が「形相」の側に、そして後項が「質料」の側に属するものである。言い換えれば、前項のものは「規定するもの」として、後項の「規定されるもの」へと関係づけられ、それぞれ働き方の違いを保持しつつ、ともに1つの「認識」を形成しているのである。そしてこのようにして「認識能力」の体系を完成することによってカントは、当時既に存在していたその分類に対して、新しい意味を付与することができたのである。即ち従来ばらばらに提出されていた認識の諸能力を、「形相—質料—図式」に従って整序し直すことを通して、それ等が人間の認識において働らく「働らき方」の相違、及びそれ等の「綜合関係」を、明らかにし得たのである。しかもこのことによって、そしてこの後に初めてカントは、「認識」における「綜合」という問題に取り組むことができたのである。

## 結 語

以上私は、『純粋理性批判』の叙述における奇妙さを手掛りに、「分析」という方法概念の重要性、その対象としての認識の「被制約性」「合成されている」(有限性)という性格を、最後に、この分析を具体的に導く「形相—質料—図式」を明らかにし得たと考える。そして以上の事柄こそ、カントが『純粋理性批判』の冒頭において既に前提していたことなのである。即ち、人間の認識は、ただ単に概念の次元だけの分析だけでは解明されず、また基礎づけられ得ないのである。従ってそのためには、概念の次元を「超えて」〈transzendenzieren〉、認識の生成の場としての「判断」、そして「認識能力」の分析にとりかからねばならないのである。しかもその分析に際して、「合成されているもの」としての「認識」は、「形相」の側に、そして「質料」の側に属するものへと具体的に分析されねばならないのである。そしてこの具体的分析の結果得られたものこそ、カント独自の「認識能力」の「体系」〈System〉なのである。勿論「体系」〈System〉は、その統一のために「理念」〈Idee〉あるいは、その具体的実施の手掛りとしての「図式」〈Schema〉を必要とするのである。(A 832f B 860f)そしてこれが「形相—質料—図式」〈Form—Materie—Schema〉である。こ

の「認識能力」の体系が既に確立されていたがために、カントは『純粋理性批判』の冒頭から容易に「孤立させる」〈isolieren〉という手続きに着手することができたのである。しかもこのような分析が『純粋理性批判』の生成前に探究されていたがために、カントはこの著作における重点を「総合」〈Synthesis〉に置くことができたのである。

そして以上のような確信こそ、私がこの小論で解明しようとした『純粋理性批判』の開始時点においてカントが既に「前提」し、あるいは立っていた「立場」なのである。そしてこの「立場」こそ、カントの有名な「思惟方式のコペルニクスの転廻」〈kopernikanische Umänderung der Denkart〉(BX VI)を可能にしたものなのである。

またそれは、より正確には「前提」というよりも、カントの経験認識あるいは世界認識に対する「先行的企投」〈d. vorgängige Entwurf〉と理解されるべきものであろう。即ち、我々有限なる人間が最初に世界を理解し、自覚しようとする時、第1に働らくのは「分析」〈Analysis〉というものであろう。そしてそれは、その働く時に既にあらかじめ、自らの働らきの「原理」「図式」を持っているのである。それがカントにあっては、「形相一質料一図式」であったのである。このような図式なくしては、分析は働くことができないのである。

そしてこのように「分析」「形相一質料一図式」が理解される時、それは「カント哲学」全般にわたってより重要な意味を持つことが予想されるのである。そしてカント自身『純粋理性批判』の叙述の進行とともに、この立場の重要性に気づくのである。従ってカントは『純粋理性批判』の「中央部」〈d. Mitte〉において、「形相一質料一図式」の根拠としての「超越論的反省」〈Transzendente Reflexion〉について論ずるのである。(A 260ff. B 316ff)つまりこの「超越論的反省」こそ、先に確定した「立場」の学的反省から獲得された『純粋理性批判』の「最高の立場」なのである。しかし、ここではこの「超越論的反省」への単なる関係が暗示されるだけであり、それがカント哲学において持つ「意味」及び「諸問題」についての論究は、この小論では断念せざるを得ないのである<sup>23</sup>。

#### 註

※カントの著作からの引用は、アカデミー版の巻数と頁数を記す。また『純粋理性批判』からの引用は、慣例に従って第1版と第2版をそれぞれA, Bで示し、その頁数とともに記す。

(1) 「地平」〈Horizont〉概念については、別の機会に論じたが、この概念がカント哲学において如何に重要なものであるかは、以下の箇所から理解される。

(cf) I. Kant 〉 Logik 〈 IX S. 41ff

(2) I. Kant 〉 Nova Dilucidatio 〈<sup>1755</sup>  
〉 Monadologia physica 〈<sup>1756</sup>  
〉 De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiiis 〈<sup>1770</sup>

(3) 以下の「分析」概念の解明に関して参考にしたものは、次の著作である。

M. Heidegger 〉 Sein und Zeit 〈 S. 5 ff

(4) 特に次の諸著作が重要である。

- I. Kant > Nova Dilucidatio <<sup>1755</sup>
- > Die falsche Spitzfindigkeit der vier syllogistischen Figuren <<sup>1762</sup>
- > Der einzig mögliche Beweisgrund zu einer Demonstration des Daseins Gottes <<sup>1763</sup>
- > Versuch den Begriff der negativen Größen in der Weltweisheit einzuführen <<sup>1763</sup>
- > Untersuchung über die Deutlichkeit der Grundsätze der natürlichen Theologie und der Moral <<sup>1764</sup>
- > De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis <<sup>1770</sup>
- (5) この「分析」概念の構造契機として残るものは、「分析するものは、誰か。」そして「分析する場合の道具は、何か。」このことについては、別の機会に論じたが、ここでは人間の思惟における「抽象する」(abstractio)という能力が重要となることを記しておく。
- (cf) I. Kant > Anthropologie in pragmatischer Hinsicht < VII s. 131
- (6) この「循環論」という言葉は、正しくは「真理とは何か。」についてカントが用いたものである。しかしこのことはまた、「認識」問題全般においても妥当することは明らかである。
- (cf) I. Kant > Logik < IX S. 50
- (7) 「孤立させる」の具体例は、以下の箇所で見られる。A 22, B 36 A 62, B 87 A 305, B 362 またこの概念については、次の箇所が重要である。A 842 ff. B 870 ff
- (8) この言明は、勿論慎重に取り扱われねばならない。
- (cf) Panlsen > Immanuel Kant <
- G. Martin > Immanuel Kant <
- (9) 以下「語源」が問題となる場合には、次の著作を参考した。
- J. Hofmeister > Wörterbuch der philosophischen Begriffe <
- Duden Bd. 7 > Herkunftswörterbuch. <
- (10) Max Wundt > Kant als Metaphysiker < S. 46 ff
- (11) I. Kant > Untersuchung über die Deutlichkeit der Grundsätze der natürlichen Theologie und der Moral <<sup>1764</sup>
- (12) I. Kant ibid.
- (13) 従来『純粋理性批判』の解釈上重視されて来たのは、ニュートン等の「物理学」であった。しかし「化学」もそれに劣らず『純粋理性批判』生成の重要な契機であったことを忘れてはならないであろう。勿論その他の学問についても同様である。
- (cf) H. Heimsoeth > Kants Erfahrung mit den Erfahrungswissenschaften <
- > Studien zur Philosophie Immanuel Kants II < 所収
- (14) ここから「分析」という方法と、「総合」という方法を、前者が『純粋理性批判』を基礎付けるもので、後者が基礎づけられたものとする解釈が提出される。このことについては、より厳密に「分析」と「総合」の関係が明らかにされるべきであるが、ここでは差し当り、このような解釈も認められよう。
- (cf) M. Wundt > Kant als Metaphysiker < S. 400 ff



- F. Kaulbach > Der philosophische Begriff der Bewegung <  
G. Prauss > Erscheinung bei Kant <

(哲学 博士課程 3 回生)

tion concerning the primary and the secondary qualities, we found that the ideas which apprehend the external object as it is in itself have following characters. That is, the characters that they are effects caused by the external objects, and that the causation is based on GOD.

On the other hand, we found in the Essay the description which is able to confirm our supposition. In Book 2. Chapter 30, 31, and 32, Locke says that the ground for the reality, adequacy, and truth of ideas consists equally in the following points. (1) That when we receive these ideas, our mind is utterly passive. (2) That they are effects caused by the qualities of the external things. (3) That this causal relation is nothing more than that of correspondence.

In the meanwhile, Locke concedes repeatedly that we know the external world only indirectly by the intervention of representatives i. e. ideas. And furthermore he says virtually that in the reception of simple ideas our mind are not utterly passive. This activity of our mind is supposed to get our knowledge of the external world to release from its indirectness.

But the author thinks that this solution is not sufficient. When we inquire into the condition for the establishment of the objective, real knowledge about the external world, we should remove the limit of 'knowledge', and turn our eyes to the total action, in which the problems of 'knowledge' are to be properly situated. And the problem itself is supposed to be solved only when we think so.

## **Das Problem der Darstellungsart und ihre Voraussetzung in der Kritik der rein Vernunft Immanuel Kants**

*von* Osamu Yoshida

Will man die Hauptschrift Kants „Kritik der reinen Vernunft“ vollständig verstehen, muß er den „Standpunkt“ (oder den „Horizont“) im voraus erklären, den Kant im Anfang der „Kritik der reinen Vernunft“ schon angenommen hat. Denn man könnte sogar die „Transzendente Ästhetik“ als den ersten Teil der „Kritik der reinen Vernunft“ nicht genug verstehen, ohne die Rücksicht auf diesen Standpunkt zu nehmen. In die „Transzendente Ästhetik“, z. B., bringt Kant die Begriffe „Form“ und „Materie“ ohne jede Erklärung und Definition ein. (A 20. B 34) Weder die Bedeutung des Begriffs „isolieren“ (A 22. B 36), den Kant als ein konkretes Verfahren der Forschung in der „Kritik der reinen

Vernunft“ vorstellt, noch die Notwendigkeit des „Isolierten“ (z. B. der „Sinnlichkeit“ und des „Verstand“) ist gleichfalls nicht explikativ.

In den vorkritischen, besonders den lateinischen Schriften macht Kant gewöhnlich den Anfang von der Erklärung und Definition der Begriffe. Im Vergleich mit diesen Schriften ist uns die Art der Darstellung der „Kritik der reinen Vernunft“ sehr fremd und läßt uns irgendeine Voraussetzung der Darstellung der „Kritik der reinen Vernunft“ vermuten.

Um diese Voraussetzung der Darstellungsart klar zu machen, betrachte ich die folgenden drei Probleme. Erstens betrachte ich das Problem der Darstellungsart der „Kritik der reinen Vernunft“, die Kant selbst als „synthetische“ in der „Prolegomena“ charakterisierte (IV s. 274 f), und zweitens das des Methodenbegriffs „Analysis“, die unrichtig in den hergebrachten Interpretationen der „Kritik der reinen Vernunft“ zu wenig geschätzt worden hat. Und drittens betrachte ich das Problem der Begriffe „Form“ und „Materie“, die Kant vielleicht in der Tradition der Philosophie gewann.

Aus diesen drei Betrachtungen werden die drei Folgen klar machen lassen. Erstens die Wichtigkeit der *analytischen* Methode in der „Kritik der reinen Vernunft.“ Zweitens die Bedingtheit und *Zusammengesetztheit* der Erfahrungserkenntnisse als Voraussetzung der „Kritik der reinen Vernunft“. Drittens das *Form = Materie — Schema* als Kants Standpunkt im Anfang der „Kritik der reinen Vernunft“ und sein Verhältniss zu der *Transzendente Reflexion*. Dies ist aber nur der erste Schritt, um die Transzendente Reflexion als den höchsten Standpunkt der „Kritik der reinen Vernunft“ zu erklären.

## Philosophie und Skeptizismus

— Hegels echter Skeptizismus —

von Sumiji Tsuzumi

In dieser Abhandlung versuche ich, das negative Moment in der spekulativen Dialektik bei Hegel zu verstehen. Dabei erörtere ich es durch eine Interpretation von Skeptizismus-Abhandlung Hegels im 2. Heft des 1. Bandes des Kritischen Journals: Verhältnis des Skeptizismus zur Philosophie, Darstellung seiner verschiedenen Modifikationen, und Vergleichung des neuesten mit dem alten.

In den neuesten Zeiten, sagt Hegel, wurde das edle Wesen des wahrhaften Skeptizismus „in einen allgemeinen Schlupfwinkel und Ausrede von der Unphilosophie“ verkehrt. Dagegen stellt Hegel das edle Wesen des alten und platonischen Skeptizismus. Mit kur-